

## 清元 三社祭

1832年3月 江戸中村座で「魁曾我後日、桜時女行列」の大切に出した所作事です。上下二巻に分かれ、上巻は三社祭の場で、その山車人形として、神功皇后と武内宿弥が常磐津で踊りました。清元の「三社祭」は下の巻で、宮戸川の場になり、それぞれ引き抜いて善玉と悪玉になって踊るというのですが、西川流では、芸者と頭で踊る趣向になっています。

弥生半ばの花の雲 鐘は上野か浅草の 利生はふかき宮戸川 ちかいの網のいにしえや 三社祭の氏子中 もれぬ誓いや網の目に 今日の獲物も信心のおかげお礼に朝参り 浅草寺の観世音 網の光は夕鱒や 昼網夜網に凧もよく乗り込む 河岸の相場にしけは 生貝生鯛生鱒 なまぐさばんだばさらんだわびた世界じゃないかいなあ そなた思えば七里が灘をのう 命や捨貝来たもの 命や命や捨貝来たものなしかへ戻ろうよ さあさ何としよか どしよかいな 撞いてくりやるな八幡鐘よ 可愛いお人の人の目をさます お人の人の可愛い可愛いお人の人の目をさます さあ何としよか どしよかいな 帰りましょ 待たしゃんせ 憎や鴉が啼くわいな それが厭さに 気の毒さに おいらが宗旨は有難い 弘法大師のいろはにほへと 変わる心はからくり的 北山時雨じゃないけれど ふられて帰る晩もあり それでお宿の首尾もよく とかく浮世は儘にはならぬ 善に強きはこれ善の綱 牛に引かれて善悪は 浮かれ拍子のひと踊り 早い手玉や品玉の 品よく結ぶ玉だすぎ かけて思いの玉櫛笥 開けてくやしき玉手箱 通う玉鉾 玉松風の もとはざざんざでうたえやうたえや 浮かれ鴉のうば玉や うややれうややれ そうだぞそうだぞ 声々にしどもなや 謡うも舞うも 法の奇特に善玉は 消えて跡なく